

『のら』は『マナ』の手が何でも器用に作ってしまつ、不思議な手に思えた。時おり『マナ』の手を触っては、じつと見て首を傾けていた。単に『のら』が不器用なだけなのかもしれないが、『のら』にはとても不思議に思えた。実は『マナ』は機械を設計する技術者であった。勤めている会社では、自分自身で色々な物を作ることもあるため、日曜大工くらしいは、たいして難しいことではなかったのである。

ある日『マナ』は設計に行き詰っていた。納期はもうすぐなのにどうしてもうまく行かない。『のら』はそんな『マナ』の前を行ったり来たりしている。よく見ると大事な『マナ』の設計図の上を、汚れた足で歩いているではないか。『マナ』は『のら』の足跡をじつと見ていた。『マナ』は怒り出すのかと思いきや、不気味に薄ら笑いしている。『のら』の丸い足跡が図形に見え、どうしてもうまく行かなかった設計が完成したのである。『マナ』は思わず『のら』を抱きしめ、「よかった、よかった」と言った。『のら』は訳がわからずキョトンとしている。『のら』は図面に付いた自分の足跡を見ながら悩んでいたが、やがてニコニコし始めた。その夜遅く『のら』は大切な図面に何か必死に書き込んでいた。

次の日『マナ』は元気に会社に出かけていった。『マナ』のカバンの中には、『のら』の足跡が付いた大切な図面が入っていた。『マナ』は上司に図面を見せようと考えていた。しかしその晩『マナ』は浮かぬ顔で帰宅してきた。『マナ』は『のら』に図面を見せた。そこには『のら』の字が無数に書かれていたのであった。『のら』はニコニコしながらうなずいている。『マナ』が怒っているとも知らずに。

